



羅針盤

いまこそ老健施設の在り方を考える 地域性と個別性、家族との絆

折茂賢一郎

全老健 常務理事

群馬県の県境にある六合村くじむら（現在は中之条町）に介護老人保健施設六合つつじ荘を開設したのが、1993年9月1日だった。「村おこし」をかけ声に、ふるさと創生事業を活用して、診療所の有床化とともに健康増進施設と老健施設を合築した、六合温泉医療センターが誕生した。

当時、人口2,000人程度の山村でこうした事業を成り立たせるためには、3つの施設を一体化すべきと考え、事務室や看護介護室なども集約した企画を出したが、県も国も首を縦に振らなかった。「別組織なのだから各々区分けして企画するように」という建前と1年以上闘った。こちらの熱意が伝わったのか、徐々にトーンが下がり、最終的には企画が通ったのだが…役人の頭の固さに辟易したことを思い出す。

次はソフトの問題に直面した。看護師や介護福祉士、理学療法士などの専門職をこんな山村で集められるのだろうか。人材確保には常に難渋したが、熱意をもって動いた結果、人材確保もできるものだと実感した。

老健施設での看護介護の方法論に関しても、一筋縄ではいかなかった。「自宅でできることは施設内でもできるようにしたい」との強い思いが私のなかであり、例えば、「ちょっとした飲酒で眠れる人には睡眠薬ではなくアルコールを提供したい」「犬や猫のペットと一緒に入所できるようにしたい」などと考えた。ペットはアレルギーの問題で受け入れることはできなかったが、お酒に関しては職員もなんとか理解してくれて、提供できるようにした。

同施設では看取りも大切にしてきた。人生の最期を最大限にいていねいに関わることはいまでは当たり前のように言われているが、同施設では本人や家族が望むように対応することを心がけ、自宅での最期を支援できるように地域のケアマネジャーや訪問看護などと

の連携も密に行ってきた。

しかし、わが国の人口減と都市部への人口集中で限界集落に近い状態に陥り、村内の利用者は激減。平成の大合併により村が隣町の一地区として吸収された。職員も高齢化してしまい、先般、六合つつじ荘を閉じることになった。各中学校区に1つあり、地域包括ケアづくりとしての中核的な機能をもつ老健施設であるはずが、その特色を失ってしまった。地域に密着して地道に活動してきたが…時代の流れには逆らえなかった。私にとっては、心の糧を失ったようなものである。

いまは、そんな群馬県を離れ、神奈川県横浜市の一角でクリニックを開業し、都市型地域医療にいそしんでいる。しかし、大都会には多くの人材も資源もあるにもかかわらず、素晴らしい高齢者ケアが展開できているのかどうかは、甚だ疑問を感じざるを得ない。

他方、昨今のコロナ禍で多くの老健施設では利用者と家族が面会できずにいる。確かに当初は未知の疾患であり仕方がなかったかもしれないが、現在でも面会制限を継続している施設も少なくない。老健施設こそは自宅との密なる連携が必要であり、介護保険法上も在宅支援の要として位置づけられているのに、いかがなものかと強く思う。感染症のまん延を最小限にする努力は当たり前のこととしながらも、利用者と家族の絆をしっかりと確保できるような体制づくりがいまこそ急務である。

さらに、リスクに対応するための監視モニターやAI技術は時代の流れのなかで必需品になっているが、同時にプライバシーの問題や利用者一人ひとりに合わせたケアの提供を忘れてはならないだろう。

いつの時代、どの場所でも、利用者の立場に立ち、個別性を確保した上で自立支援の提供を展開することは、どうして容易ではないのだろうか…？